

## 中国新石器時代早期の墓に見られる中国化現象

小 川 誠\*

### Research on the Appearance of Chinalization Found in the Cemeteries in Chinese Early Neolithic Society

Makoto OGAWA\*

#### 要旨

筆者はかつて、河南省を中心に分布する裴李崗文化の墓地に、単なる差異をこえた階層性が萌芽していたことを証明した。本論は、裴李崗文化以外の新石器早期段階の葬制に対して総合的な分析を加えることで、それが黄河中流域のみで見られる特殊な現象であったのか否かを検証した。結果、明確な階層性は、裴李崗文化の墓群以外で確認されないこと、中原の中原化、すなわち中国の中国化現象は、新石器早期段階の黄河中流域地帯ですではじまっていた可能性があることを論証した。

#### はじめに

中国の各地に、一定の空間的なひろがりをもった考古学文化が林立するようになるのは、紀元前7000年から5000年にかけて、とくに前6000年紀を中心とした時代であった。この時期は、黄河の中流域に仰韶文化が誕生する以前という意味で、「先仰韶文化期」あるいは「先仰韶期」と呼ぶことができる。新石器の時代区分にしたがうならば、新石器早期段階に属することになる<sup>(1)</sup>。

中国新石器文化の研究成果を集大成した『中国考古学 新石器時代巻』によるならば、この時期、中国には、大地湾、裴李崗、磁山、後李、興隆窪、彭頭山、皂市下層、城背溪、跨湖橋、頂嶺山、

甌皮岩第五期、以上11の考古学文化が存在した<sup>(2)</sup>。

これらの諸文化は、黄河と長江の中下流域を中心としつつ、北は東北地方、南は東南地方に至る、ほぼ中国全土にわたるひろがりを見せながら、互いにどのような関係を有していたのであろうか。あるいは、連携の希薄な、処々に独立した考古学文化として存続していたのであろうか。当時の中国大陸に点在する諸文化の相互関連性については、いくつかの見方が提示されている。

戴向明は、黄河流域の各地の文化は完全に隔絶した状態にあったとはいえないものの、相互間の交流影響関係は欠落し、各文化は封鎖的保守的な状態にあり、進化の主体は各文化の独立発展に

\*人文学部 日本文化学科

- (1) 中国の研究者は、一般に、先仰韶文化期の諸文化を新石器中期段階に組み入れる。本論では、徐水南莊頭等、新石器最早期段階の遺跡を除いた先仰韶文化の時代を、仮に、新石器早期段階とみなすことにする。
- (2) 中国社会科学院考古研究所『中国考古学 新石器時代巻』（中国社会科学出版社、2010年）、第三章、参照。なお、上掲書では、本文で指摘した11文化に大岩五期を加えた12文化を、当該時期の考古学文化として紹介しているが、大岩五期に関しては資料不足のため割愛した。
- (3) 戴向明「黄河流域新石器時代文化格局之演变」『考古学報』1998年第4期。

ゆだねられていたと述べている<sup>(3)</sup>。また、趙輝は、紀元前5000年以前の新石器文化を「北方旱作農業」と「南方稲作農業」の2つの経済文化区に分けたうえで、文化間の関係はゆるやかでありながら粗密の別、とくに黄河中流域の関係性が密であったと指摘する<sup>(4)</sup>。

これに対して、韓建業は、黄河中流域に分布した裴李崗文化は、渭河流域や漢水上流域の諸文化に強い影響力を及ぼし、また緊密な連携を保つことで「中原文化区」を形成し、裴李崗文化を中心とした「早期中国文化圏」の雛形を創成したと論じている<sup>(5)</sup>。前掲、『中国考古学 新石器時代巻』も、黄河中流域の大地湾、裴李崗、磁山の3文化は、巨大な「核心文化区」を形成していたという見方をとっている<sup>(6)</sup>。

上記の3氏に限っていうならば、戴、趙、韓の順に文化の相関性を主張する度合が強くなる。最後の韓論文では、中原の周囲に対する影響力を重視し、この時期すでに中原化がはじまっていたという論調すらうかがえる。同じことは、『中国考古学 新石器時代巻』にもいえる。そこでは、韓論文と同じく、核心という用語を使って当時の中原地域の先進性を強調している<sup>(7)</sup>。

中国の新石器早期段階の文化間関係については、このように、さまざまな見方が存在する。ただし、どちらかといえば、相互交流はあってもゆるやか、あるいは希薄なものであったという見方が強いように思う。韓氏のような考え方は、従来の、いわゆる中原中心主義的な見方に傾いているといえるかもしれない。

筆者はかつて、裴李崗文化の墓を研究するなか

で、集団墓を構成する人員に、①年長者は手厚く葬る(年齢差)、②男女間に副葬品の種類や多寡の区別をつける(男女差)、③強い絆で結ばれた親族には思い出の品をたくさん入れる(親族差)、④狩猟や漁撈に長じたものには関連用具を多く添える(職業差)、といった、社会通念上の現象として普通にあらわれてくる違いをこえた、等級差や階級差を見いだした。そして、新石器早期段階の社会において、格差あるいは階層性が芽ばえていることを確認した<sup>(8)</sup>。

新石器のはやい段階で、のちに中原と呼ばれることになる土地で、人びとのあいだに格差が存在した事実は何をあらわしているのか。仮に、このような階層性の萌芽が裴李崗文化以外(河南省以外)の地域でも見られる現象であったならば、これは新石器早期文化全体に及ぶ事象として認められ、その場合、階層差を表現した各文化の葬制が独立して展開したのか、相互影響のなかで展開したのかは別として、中国における、紀元前7000年から5000年にかけての社会の展開は意外にはやかたことが証明される。

反対に、このような現象が他の地域で認められないとするならば、これは、新石器早期段階における裴李崗文化の先進性、すなわち該地における社会の展開が他地域に先んじていたことをあらわすことになる。今、中原が求心力を増し中心化していく中原の中原化現象を、中国に特有な歴史の流れとみなし、それを中国化現象といいかえてみるならば、まさに、中国の中国化現象は、新石器時代の早期段階においてすでに発現していた可能性を有することになる。

(4) 張輝「以中原為中心的歷史趨勢的形成」『文物』2000年第1期。

(5) 韓建業「論新石器時代中原文化的歷史地位」『江漢考古』2004年第1期、同「裴李崗文化的遷徙影響與早期中國文化圈的雛形」『中原文物』2009年第2期。

(6) 注2、中国社会科学院考古研究所編著、203頁、参照。

(7) 注2、中国社会科学院考古研究所編著の「後記」によるならば、当該部分を執筆したのは、朱延平である。

(8) 小川誠「賈湖遺跡墓群の研究」『駒沢女子大学研究紀要』第17号、2010年、同「裴李崗文化の墓に関する研究」『駒沢女子大学研究紀要』第18号、2011年。

このような問題意識のもと、本論では、裴李崗以外の新石器早期段階の葬制に関して、総合的な分析を行い、観察結果をまとめてみたい。対象とするのは、紀元前7000年から5000年にかけて存続した、大地湾、磁山、後李、興隆窪、彭頭山、皂市下層、城背溪、跨湖橋、頂嶺山、甌皮岩第五期、以上10の考古学文化である。先ほど指摘した11文化から裴李崗を除いた10文化ということになる。まとめるにあたっては、これらを、黄河中下流域、北方地区、長江中下流域、南方地区の4ブロックに分ける。もちろん、なかには墓の資料が希薄な文化も存在する。ただしここでは網羅的であることを最優先するため、分析対象としては不適切なものも含めて観察を進めていくことにしたい。

## 1. 黄河中下流域<sup>(9)</sup>

### 1-1. 大地湾文化

大地湾文化<sup>(10)</sup>は、渭河流域、及び漢水上流域を中心に分布する新石器早期の考古学文化である。土器は、丸底鉢と深腹罐を基本とする単純な構成で、下部に三短足が付されることが多い。両器種ともに拍印による粗縄文が多用され、一部の鉢には、口縁部の外周に研磨痕や紅彩帯が認められる。

大地湾文化で考察の対象としたいのは、大地湾

第一期文化遺存<sup>(11)</sup>、及び白家村早期・晩期文化遺存<sup>(12)</sup>である。

大地湾第一期文化遺存では15基の墓が検出された。いずれも長方形の堅穴土坑墓である。墓は、密集した明確な墓域を形成せず、おおよそ90×50mの敷地内に、灰坑とともに散在していた。しかしよく見ると、北西部に2箇所、中央部の西寄りに2箇所、計4箇所の小規模なまとまりが観察される。墓数は、3基、2基、5基、2基である。

葬法は、単人の仰身直肢葬で、年齢性別が識別できるものは、みな青年男性であった。副葬品は丸底鉢や深腹罐等の土器を主体としながら、一部の墓に石器や陶紡輪、陶墜、またイノシシの下顎骨が3基に埋納されていた。

副葬品の数は、0点から3点までが11基、7点から10点までが4基となっており、中間の4～6点墓は1例もない。単純に言えば、品物が多く添えられた人物と少ない人物がいたということになる。副葬品最多点数10という数は、例えば、裴李崗文化の単人墓における最多点数、裴李崗24点、莪溝北崗14点、石固13点、水泉31点、賈湖33点よりも劣るが、大地湾第一期文化遺存は墓の絶対数が少なく、上記遺跡の墓数が、裴李崗114基、莪溝北崗68基、石固69基、水泉120基、賈湖349基である

(9) 黄河中下流域の新石器早期文化には、裴李崗以外に、大地湾、磁山、後李の3文化が存在する。ただし、磁山文化の諸遺跡からは墓が発見されていない。したがって、本論では、大地湾と後李、両文化のみを扱うことにする。

(10) 大地湾文化に関しては、1958年に当該文化の存在をはじめて示唆した華陽老官台の名をとって、「老官台文化」と呼ばれることが多い。例えば、嚴文明は、「黄河流域新石器時代早期文化的新發現」『考古』1979年第1期のなかで、磁山と発展段階を同じくする陝西閩中地区の文化として「老官台文化」の名称を使用した。また、張宏彦による最新の研究、「渭水流域老官台文化分期与類型研究」『考古學報』2007年第2期においても、「老官台文化」の呼称が使われている。他方、注2の中国社会科学院考古研究所編著や、劉慶柱編『中国考古發現与研究（1949-2009）』（人民出版社、2010年）では、豊富な発掘資料を提供した秦安大地湾を代表遺跡と考へ、「大地湾文化」という名称を使用している。文化名の選択は研究者の裁量にゆだねられるが、本論では一貫して「大地湾文化」を使う。

(11) 大地湾第一期文化遺存に関しては以下の報告がある。①甘肅省文物考古研究所「秦安大地湾新石器時代遺址發掘報告（上下）」（文物出版社、2006年）、②甘肅省博物館・秦安県文化館・大地湾發掘組「一九八〇年秦安大地湾一期文化遺存發掘簡報」『考古与文物』1982年第2期、③甘肅省博物館・秦安県文化館・大地湾發掘組「甘肅秦安大地湾新石器時代早期遺存」『文物』1981年第4期。大地湾遺跡は、第一期から第五期に分けられている。第二期以降は仰韶文化期を中心とした遺存であり、本論で考察の対象とするのは新石器早期に該当する「第一期文化遺存」である。

(12) 白家村の報告には以下のものである。①中国社会科学院考古研究所「臨潼白家村」（巴蜀書社出版、1994年）、②中国社会科学院考古研究所陝西六隊「陝西臨潼白家村新石器時代遺址發掘簡報」『考古』1984年第11期、③西安半坡博物館「陝西臨潼白家村遺址調查試掘簡報」『史前研究』1983年第2期。白家村は、文化層の堆積状況を根拠に「早期文化遺存」と「晩期文化遺存」に分けられた。どちらも新石器早期段階に属するものであり、本論では両者を分析の対象としている。

ことからして、単純な比較はできない。

ここで、先ほど述べた墓のまとまりに着目して分析してみると、副葬品が多い4基の墓は、各墓群に分散している。第1墓群はM15(7点)、M13(2点)、M14(2点)、第2墓群はM211(10点)、M207(3点)、第3墓群はM208(8点)、M209(3点)、M225(3点)、M227(3点)、M228(0点)、第4墓群はM308(8点)、M307(3点)、となる。仮に、これらのまとまりが家族の単位をあらわすとすれば、大地湾第一期文化遺存の住人は、家族の主の墓に副葬品を多く埋納していたことになる。しかも、副葬品が多い4基中、年齢性別が判明している2基は、50歳前後の成人男性であり、土器や石器といった日常品のほかに、イノシシの下顎骨を腹部付近に安置していた。

検討対象としたもうひとつの遺跡、白家村からは、早期と晩期あわせて28基の墓が検出された<sup>(13)</sup>。早期2基、晩期26基である。当遺跡も、墓は雑然と造営されているのだが、大地湾第一期文化遺存と同じく、第I区で2箇所、第Ⅲ区で2箇所の小さなまとまりが確認できる。墓の数は、6基と3基、及び4基と3基である。

白家村の墓地は、仰身直肢の単人長方形竪穴土坑墓を主流とし、一部、側身屈肢葬と合葬墓を見ることができる。側身屈肢葬は、早期墓1基、晩期墓2基の計3基、合葬墓は、早期墓で7人合葬が1基、晩期墓で2人合葬が1基発見されている。晩期の側身屈肢墓は不規則な隅丸方形あるいは

楕円形をなし、両例ともに女性が埋葬されていた。副葬品はもたない。一方、早期の7人合葬墓は不規則な円形を呈し、仰身直肢2体、側身屈肢4体、俯身1体、計7名の人骨が組み合わされていた。性別が判明している4名はすべて女性である。当遺跡では、女性に特殊な葬法が適用されていた。しかもそれらは、他の墓から離れて点在する。特定の女性に対して側身屈肢や合葬を行う習わしは、大地湾第一期文化遺存で見られない葬俗であり、単人の仰身直肢葬とは異なるという意味で、当遺跡の特殊性がうかがえる<sup>(14)</sup>。

副葬品が添えられた墓は、28基中10基である。1点が6基、2点が3基、6点が1基となっている。最大数を有する6点墓は、他の墓から離れて造営されており、墓どうしの関連性はうかがえない。他方、小規模なまとまりを見せる4群を調べてみると、I区の6基墓群は、M16が1点、他墓は0点、同3基墓群は、M26が2点、他墓は0点、Ⅲ区の4基墓群は、M10が2点、他墓は1点、同3基墓群は、M2が1点、他墓は0点、となっている。

状況証拠が少ないため、ここから何かを論じることではできないが、当墓地における副葬品埋納墓10基のうち7基はいずれかの墓群に属していること、特定墓群のすべての墓が副葬品0点という事例はないこと、墓群中副葬品が最多の墓には、動物の下顎骨や石珠といった特殊な埋納品が添えられていたこと、などに目が向く。家族墓を思わせる墓のまとまりのなかで、わずかな差ではあるが副葬品の

(13) 白家村では、土坑墓以外に小児用の甕棺葬が8基検出された。それらは、成人墓と同じ領域に、単独で埋葬、あるいは灰坑中に1基もしくは2基埋められていた。甕棺は、深腹罐に丸底鉢を蓋のように合わせて作られている(注12、①中国社会科学院考古研究所報告、45-47頁、参照)。

(14) 当墓地では、さらに、骨盤の一部に穿孔を施した人骨が出土している。人骨の残存状態が悪く正確な数値はわからないが、例えば、17号墓の女性や20号墓の男性の骨盤にはあきらかな穿孔の痕が残されていた。これらの穿孔は生前に行われたもので、葬送の過程で付与された印ではない。

(15) 大地湾文化では、大地湾第一期文化遺存、白家村早期・晩期文化遺存以外からも墓が検出されているが、資料的価値が薄いので本文では分析の対象から外した。以下に概略を記しておきたい。①渭南北劉早期では墓が9基発見された。長方形もしくは不規則形の土坑墓に単人仰身直肢の葬法で埋められていた。副葬品はほとんど見られない(西安半坡博物館・渭南市博物館・陝西省考古研究所「渭南北劉遺址第二、三次発掘簡報」『史前研究』1986年第1・2期)。②南鄭龍崗寺からは7基の墓が検出された。残存状態は悪く、一部の骨を欠いた単人仰身直肢の二次葬が確認された(陝西省考古研究所『龍崗寺新石器時代遺址発掘報告』文物出版社、1990年、陝西省考古研究所漢水隊「陝西南鄭龍崗寺発見的“前仰韶”遺存」『考古与文物』

点数や質に違いを設ける現象は、大地湾第一期文化遺存の事例と共通する<sup>(15)</sup>。

## 1-2. 後李文化

後李文化は、北辛文化に先行する山東最古の新石器文化である<sup>(16)</sup>。今のところ、標準遺跡となっている淄博市の後李を含め、全体に泰山山系北側の沖積平野を中心に分布している。土器は夾砂質の胎土を用い、手作りで丸底をなすものが多い。器種は丸底の釜を主流とし、そのほか、鉢、壺、土製支脚等が製作されていた。

墓は3遺跡で確認されている。最も資料が豊富なのは小荊山である<sup>(17)</sup>。そこからは、計21基の墓が、3列に整然と並べられた状態で見つかった。各列は、12基、5基、4基で構成される。頭位も、2基が逆向きであるのを除き、わずかに東に偏した北向きに統一されている。規律正しく営まれた墓地であった様子がうかがえる。

葬法は、葬具のない単人仰身直肢の竪穴土坑墓である。男女比は、第1列(12基)が、男性3名、女性7名、不明2名、第2列(5基)が、男性3名、女性2名、第3列(4基)が、男性3名、女性1名、と

なっている。第1列に女性墓が多いのが目立つ以外に、これといった特徴はない。

副葬品は22基のうち12基から出土した。総計14点と数は少ない。内容は、14点中10点が貝殻、あとは、簪等の貝製品と骨釘である。これらの墓には土器が1点も埋納されていなかった。

後李文化では、小荊山のほかに後李と月荘で墓が発見された。どちらも墓数が少なく、前者2基、後者1基のみである<sup>(18)</sup>。そのうち、後李の墓は、1基が熟土二層台、もう1基は側室墓である。どちらも単人の仰身直肢葬で、副葬品は前者2点、後者4点を数える。二層台や側室を設ける墓の造営法は、他地に類例を見ない。一方、月荘の墓は長方形の土坑墓であり、児童が1体葬られていた。副葬品は出土していない。

## 2. 北方地区

北方地区でとりあげるのは、新石器早期段階に属する興隆窪文化である。興隆窪文化は、内蒙古自治区の東南部、とくに赤峰付近に集中して分布しており、その数は複合遺跡を含めると120余、単純な興隆窪文化の堆積層を有する遺跡に絞って

1988年第5・6期)。<sup>③</sup>西郷李家村では3基の墓が発見され、そのうちの2基は竪穴土坑に埋納された小児甕棺葬である。成人墓は長方形竪穴土坑の形状をなし、15点の副葬品が埋葬されていた(陝西省考古研究所・陝西省安康水電站庫区考古隊『陝南考古報告集』三秦出版社、1996年)。<sup>④</sup>紫陽馬家營では長方形竪穴土坑墓が1基発見された。人骨は腐朽し副葬品のみが残されていた(前掲<sup>③</sup>陝西省考古研究所他報告)。<sup>⑤</sup>漢陰隱家壩では3基の甕棺墓が発見された。いずれも三足付深腹罐と圈足付丸底鉢を組み合わせたもので、土坑のなかに埋められていた(前掲<sup>③</sup>陝西省考古研究所他報告)。

(16)山東では、後李文化よりも古い新石器最早期段階の遺跡が沂源で発見されている。扁扁洞及び黄崖の洞穴遺跡である。年代は、11000年前から9600年前とされている。土器片は夾砂質で、釜と鉢の2器種が作られていた。釜形器が出土していることから後李文化との関連性が想起されるが、詳細はわからない(孫波・崔聖寛「試論山東地区新石器時代早期遺存」『中原文物』2008年第3期)。

(17)小荊山の報告には以下のものがある。<sup>①</sup>濟南市文化局文物処・章丘市博物館「山東章丘小荊山遺址第一次発掘」『東方考古』第1集、2004年、<sup>②</sup>山東省文物考古研究所・章丘市博物館「山東章丘市小荊山後李文化環濠聚落勘探報告」『華夏考古』2003年第3期、<sup>③</sup>山東省文物考古研究所・章丘市博物館「山東章丘市小荊山遺址調査、発掘報告」『華夏考古』1996年第2期、<sup>④</sup>章丘県博物館「山東章丘県小荊山遺址調査簡報」『考古』1994年第6期。

(18)後李に関しては、済青公路文物工作隊「山東臨淄後李遺址第三、四次発掘簡報」『考古』1994年第2期、同「山東臨淄後李遺址第一、二次発掘簡報」『考古』1992年第11期、月荘に関しては、山東大学東方考古研究中心・山東省文物考古研究所・済南市考古研究所「山東済南長清区月荘遺址2003年発掘報告」『東方考古』第2集、2006年、を参照。

(19)李少兵・索秀芬「内蒙古自治区東南部新石器時代遺址分布」『内蒙古文物考古』2010年第1期。

(20)陳国慶は、興隆窪文化を1期から5期に(陳国慶「興隆窪文化分期及相關問題探討」『辺疆考古研究』第3輯、2005年、参照)、また、索秀芬・郭治中は、同文化を早中晩の3期に分けたうえで、興隆窪等代表遺跡の分期を対応させることで、早期Ⅰ段、同Ⅱ段、中期Ⅰ段、同Ⅱ段、及び晩期の計5期への編年を試みている(索秀芬・郭治中「白音長汗遺址興隆窪文化一期遺存及相關問題」『辺疆考古研究』第2輯、2004年、表一、参照)。

も20数個所を数えるという<sup>(19)</sup>。同文化に関しては、出土土器を拠り所とした編年や<sup>(20)</sup>、興隆窪類型、南台子類型、白音長汗類型、東寨類型等、文化類型化の研究が行われているが<sup>(21)</sup>、本論では詳細には立ち入らず、それらを一括して興隆窪文化とみなすことにする。

興隆窪文化の土器は、筒形罐が主流である。例えば査海の場合、文化層中から出土した土器片の99.5%、住居址から出土した土器片のほぼ100%が筒形罐であった。筒形罐は、夾砂質の胎土で作られており、平底の部分を含め、器胎は厚くて重い。器表には之字形文や人字文を連続してめぐらせる。これは、興隆窪文化に共通した文様構成である。筒形罐以外には、鉢と杯が若干見られるが数は極めて少ない。興隆窪文化は、嚴文明が土器形態をもとに設定した「古代文化三系統」のうちのひとつ、筒形平底罐を炊器とする「東北系統」文化の初源期にあたる<sup>(22)</sup>。

本論では、興隆窪<sup>(23)</sup>、査海<sup>(24)</sup>、白音長汗<sup>(25)</sup>

の3遺跡をとりあげ墓を紹介してみたい<sup>(26)</sup>。興隆窪は、興隆窪文化の標準遺跡である。当遺跡のりびとは、「居室墓」という特殊な葬制をとりいていた。居室墓には2種類が認められる。ひとつは、居住面を掘って長方形の墓坑を作ったもの、もうひとつは、居住面下の生土層に墓坑を掘削したものである。後者の場合、墓坑開口部の土は硬く、居住面と一体化している。葬られた様子を再現するならば、前者は、居内に死者を埋葬したあとに堅穴住居を廃棄し別の場所に移った、後者は、死者を埋葬したあとに墓坑部分を突き固め居住面と一体化しそのまま住み続けた様子がうかがわれる。

興隆窪からは居室墓30基ほどが検出されているらしいが<sup>(27)</sup>、詳細が報告されるのは2基のみである。それによると、居室墓の葬法は、単人の仰身直肢葬で、堅穴土坑墓は壁際に作られていた。副葬品は小型のものを主とし、石器、骨器、玉器、蚌器の類が埋納されていた。注目すべきは、117号墓に一对の環形玉玦、118号墓に大量の石刃

(21) 注20、陳国慶論文では、「興隆窪類型」「南台子類型」「白音長汗類型」「東寨類型」という類型名称を、白音長汗の報告（内蒙古文物研究所・吉林大学考古学系「内蒙古西旗白音長汗新石器時代遺址1991年発掘簡報」『文物』2002年第1期）では、「興隆窪文化南台子類型遺存」「興隆窪文化白音長汗類型遺存」という名称を用い、同文化の類型化を意識した報告内容に仕上げている。なお、興隆窪よりも若干時代が古い遺跡に敖漢旗小河西がある（楊虎・林秀貞「内蒙古敖漢旗小河西遺址簡述」『北方文物』2009年第2期、等参照）。本遺跡に対しては、興隆窪との時間差、文化差を意識して「小河西文化」と呼ぶこともあるが、今のところ、興隆窪文化の最早期段階としてとらえるのが通例となっている。

(22) 嚴文明「中国古代文化三系統（提要）－兼論赤峰地区在中国古代文化發展中的地位」『中国北方古代文化國際學術檢討會論文集』（中国文史出版社、1995年）、所収。

(23) 中国社会科学院考古研究所内蒙古工作队「内蒙古敖漢旗興隆窪聚落遺址1992年発掘簡報」『考古』1997年第1期、中国社会科学院考古研究所内蒙古工作队「内蒙古敖漢旗興隆窪遺址発掘簡報」『考古』1985年第10期。

(24) 査海の主要な報告には以下のものがある。①遼寧省文物考古研究所『査海 新石器時代聚落遺址発掘報告（上中下）』（文物出版社、2012年）、②辛岩・方殿春「査海遺址1992～1994年発掘報告」『遼寧考古文集』（遼寧民族出版社、2003年）、③遼寧省文物考古研究所「遼寧阜新県査海遺址1987～1990年三次発掘」『文物』1994年第11期、④方殿春「阜新査海遺址的発掘与初步分析」『遼海文物学刊』1991年第1期、⑤遼寧省文物考古研究所「阜新査海新石器時代遺址試掘簡報」『遼海文物学刊』1988年第1期。

(25) 白音長汗の報告には以下のものがある。①内蒙古自治区文物考古研究所『白音長汗－新石器時代遺址発掘報告（上下）』（科学出版社、2004年）、②索秀芬・郭治中「白音長汗遺址小河西文化遺存」『边疆考古研究』第3輯、2005年、③内蒙古文物考古研究所・吉林大学考古学系「内蒙古西旗白音長汗新石器時代遺址1991年発掘簡報」『文物』2002年第1期、④内蒙古自治区文物考古研究所「内蒙古西旗白音長汗新石器時代遺址発掘簡報」『考古』1993年第7期、⑤郭治中・包青川・索秀芬「林西旗白音長汗遺址発掘述要」『内蒙古東部区考古学文化研究文集』（海洋出版社、1991年）。

(26) 類型名称として使われている、南台子及び東寨からは墓が発見されていない。また、興隆窪文化では、ほかに榆樹山、西梁で墓が発見されているが（楊虎・林秀貞「内蒙古敖漢旗榆樹山、西梁遺址房址与墓葬綜述」『北方文物』2009年第2期、11頁、表2、参照）、資料が少ないため本文から除外した。ちなみに、両遺跡あわせて5基を数える墓には、室内葬と室外葬の別がある。いずれも堅穴墓であり、5基中3基が蹲踞式の埋葬形態をとっていた。副葬品は小型の装飾品が主体であり、土器は出土していない。両遺跡は、興隆窪文化のはやい段階に相当する。

(27) 楊虎・劉国祥「興隆窪文化居室葬俗及相關問題探討」『考古』1997年第1期、27頁、参照。

や牙飾、イノシシの全体骨格2頭分が埋められていたことである。

査海は、海拔300m弱の丘陵上に立地する集落遺跡である。1986年から94年にわたる発掘の結果、住居、灰坑、墓、石積遺構等、集落のほぼ全容があきらかになった。とりわけ、集落中心部に築かれた石積遺構は、竜のかたちをしているところから「竜形堆積」と呼ばれ、集落の中心的な存在として注目を集めた。

墓は、集落の中央に造営された全長19.7mの石積堆積遺構の南東部に、まとまった状態で10基が発見された。いずれも長方形の堅穴土坑墓で、仰身直肢の状態で葬られていた。方向は、真北を中心に、東西15度程度の範囲におさまっている。副葬品は10基中2基に見られ、2基中1基には足下に筒形罐2点、もう1基には足先端部に石斧等23点の石器が埋納されていた。前者は成人女性、後者は成人男性である。墓群の付近でイノシシの焼骨や玉器等を入れた灰坑が発見されていることから、墓を含め、石積堆積遺構を中心とした何らかの祭祀行為、報告者のいう「宗教信仰崇拜祭祀」が想定できる<sup>(28)</sup>。

査海では、堅穴土坑墓のほかに、6基の居室墓が営まれていた。F7Mを例にとるならば、それは、室内の西側に壁に沿うように造営されている。墓長は1.2mと小さく、隅丸長方形の土坑墓の底部から児童の臼歯が出土した。6基のうち4基で児童の骨が確認されることから、当遺跡では、児童を居室内に葬る習慣があったことがあきらかである。なお、F7Mの場合、室内活動面の土層下に開口部が存在しており、子どもを埋葬したあと家族はそのまま住んでいたことがわかる。

白音長汗は、興隆窪文化から、趙宝溝、紅山、小河沿文化までの堆積を有する遺跡である。一期遺存と二期遺存が興隆窪文化、三期、四期、五

期遺存はそれ以降の3文化に該当する。分析の対象とするのは、墓が未見の一期遺存を除いた二期遺存である。二期遺存には甲類と乙類があり、甲類(二期甲類)は「南台子類型」、乙類(二期乙類)は「白音長汗類型」に相当する。年代は甲類の方が古い。

二期甲類は出土資料が少なく、住居址2基と墓3基のみが確認されている。それに対して、二期乙類は本遺跡中の主要な遺存であり、囲溝2条、住居址54基、灰坑9基、墓14基が検出された。出土遺物も豊富である。以下、甲類と乙類の墓を観察していきたい。なお、甲類、乙類の墓地ともに集落からやや離れた場所に営まれており、I号墓地、II号墓地、III号墓地と命名されている。

甲類に属する墓3基は、堅穴の長方形石板墓である。墓坑壁に何枚かの石板を立てて墓内を囲んでいることから、このような名称がつけられた。壁板に加え、墓底と墓頂に石板を複数枚敷いたり、墓の周囲に石を並べた例も見受けられる。また、I号墓区の5号墓は、丘陵頂部にめぐらせた環状列石の中央に築かれていた。甲類の墓は、いずれも単人葬で、男性墓2基、女性墓1基の構成である。副葬品は、3基中1基に土製と石製の筒形罐が各1点見られるのみである。盗掘のため副葬品の残存状態は悪い。

乙類の墓は、I号墓区とII号墓区から、それぞれ7基が検出された。14基のうち11基は、長方形堅穴墓の上に石塊を積みあげた積石土坑墓である。2号墓が男女2人合葬のほかは、すべてが単人葬であり、仰身直肢、仰身屈肢、仰身暈肢の3種類の形態が認められる。

乙類の墓には副葬品の多寡がある。副葬品は、14基中8基の墓に添えられており、少ないものは1点、多いものは100点以上に達する。しかしこれは、例えば7号墓の場合、腰部に残存していた蚌飾だけ

(28) 注 24、①遼寧省文物考古研究所報告、539頁、参照。

で111点を数えるといった具合に、一組の装飾品をばらして合計した数値であり正確とはいえない。蚌飾等、つながれて使われたことが想定される装飾品を一組とするならば、おそらく1点から10点程度の幅におさまるであろう。それよりも注目すべきは、これらの14基の墓に日用品がほとんどおさまられていないことである。副葬品の中心をなしたのは、蚌飾、石飾、玉飾等、装身具の類である。玉飾のなかには、玉玦2点が含まれていた。

### 3. 長江中下流域

長江中下流域には、彭頭山、皂市下層、城背溪、跨湖橋、以上4つの新石器早期文化が存在する。そのうち、彭頭山と皂市下層の両文化は、湖南省の北部、澧水中流域の南北にひろがる平原一帯に分布する。一方、城背溪文化は、湖北省の西部、長江三峡東部から江漢平原にかけての長江流域を分布範囲とする。当文化は彭頭山や皂市下層の北にあつて、両文化と同時併存した時期を有していた。

長江中流域に対し、下流域では、河姆渡や馬家浜文化を遡る新石器早期段階の遺跡はほとんど発見されていない。唯一、杭州市の蕭山区で、跨湖橋文化の標準遺跡(跨湖橋)が確認されるのみである。

これらの4文化のなかで、墓が発見されたのは、管見の限り、彭頭山、八十壩、柳林溪においてほかにない。前2者は彭頭山文化、後1者は城背溪

文化に帰属する。ここでは、比較的資料がそろった彭頭山文化の墓を紹介してみたい<sup>(29)</sup>。

彭頭山文化の遺跡は、澧水中流域の北岸を中心に分布する。標準遺跡である彭頭山<sup>(30)</sup>は皂市下層文化よりも時代が古く、分布領域も狭く、土器等において原始性をそなえていたため、「彭頭山文化」と命名された<sup>(31)</sup>。

彭頭山文化の土器は、球体丸底仕様の罐や釜が主流である。器胎は厚く、胎土には、稻藁や稲粃とおぼしきものも含め、炭化した植物の夾雑物が多量に含まれていた。文様は、腹部と底部に縄文を施すのを常とする。

墓は、彭頭山と八十壩<sup>(32)</sup>で発見された。前者は21基、後者は98基を数える。彭頭山の墓は単人二次葬を中心とする。21基中13基が二次葬である。墓の形態は統一性に欠け、墓坑は縦じて浅い。深さ20cm前後、最深例でも45cm程度にとどまる。報告者は、一群の土坑墓を、方形もしくは長方形、楕円形、不規則形の3種類に分類する。

副葬品は、罐、釜などの土器が主体である。点数に大きな差異は見られない。ただし、報告書で「陶片」と称される、いわゆる土器片がまとまって出土している墓が21基中10基ある点には注目しておきたい。多いもので1墓中135片を数える。これが、単に復元不可能な土器の残片を数えているのか、埋葬時に意図的に粉碎して埋めたものを陶片と称しているのかはわからないが、例えば40号墓を見ると、8点出土した土器片は2個所にまとめられた状態にあ

(29) 城背溪文化の遺跡である柘埭柳林溪からは墓が3基発見された。それらは単人の長方形竈穴土坑墓で、仰身直肢の状態で葬られていた。副葬品はなく、1号墓の足下に石塊を確認するのみである。柳林溪の報告に関しては、國務院三峡工程建設委員会弁公室・国家文物局『柘埭柳林溪』(科学出版社、2003年)、などを参照。

(30) 彭頭山の報告には以下のものがある。①湖南省文物研究所『彭頭山与八十壩(上下)』(科学出版社、2006年)、②湖南省文物研究所・澧県文物管理所「湖南澧県彭頭山新石器時代早期遺址発掘簡報」『文物』1990年第8期、③湖南省文物研究所・湖南省澧県博物館「湖南省澧県新石器時代早期遺址調査報告」『考古』1989年第10期。

(31) 注30、③湖南省文物研究所他報告、875頁、参照。彭頭山文化は存続期間の長い文化であるため、何人かの研究者により編年も試みられているが、本論では一括して彭頭山文化として扱う。編年研究に関しては、裴安平「彭頭山文化初論」『長江中游史前文化暨第二届亞洲文明學術討論會論文集』(岳麓書社、1996年)、所収、何介鈞「長江中游原始文化再論」同前掲書、所収、などを参照。

(32) 湖南省文物研究所『彭頭山与八十壩(上下)』(科学出版社、2006年)、湖南省文物考古研究所「湖南澧県夢溪八十壩新石器時代早期遺址発掘簡報」『文物』1996年第12期。



った。陶片が報告される他墓においても、同様の状況が観察される。これは、意図的に粉碎して埋めた可能性を考えなくてはならない。

八十塚の墓も、彭頭山と同じく単人の堅穴土坑墓を基本とする。墓の種類はさらに増え、報告者は、浅坑長方形墓、浅坑楕円形墓、深坑楕円形墓、深坑不規則形墓の4種類に分けている。後の2種は、彭頭山では見られなかった形態である。そのなかで、深坑楕円形墓は98基中62基、全墓の約63%を占めていた。深さは30cmをこえ、なかには49号墓のように118cmを測る事例も見受けられる。

葬式は、人骨の残存状態が悪いためよくわからない。おそらく、単人の一次葬もしくは二次葬であったと推定される。副葬品には、翡翠石飾、穿孔石佩、獣牙など、土器以外のものが散見されるが、それらは数基に限定されており、副葬品のなかできわだった状況を示すものではない。彭頭山の墓で顕著であった陶片の埋納は、98基中31基で確認される。八十塚は、彭頭山と共通する部分を有しながら、当遺跡に独自の葬制も展開させていた。

#### 4. 南方地区

南方地区においては、広西壮族自治区で新石器早期段階に属する遺跡が複数報告されている。それらは、貝丘、沙丘、洞穴といった多様な立地状況を示し、同自治区の南部、中央部、東北部、西部にまとまりをつくって分布する<sup>(33)</sup>。いくつかの

遺跡からは墓も発見された。本論では、南部の頂嶺山<sup>(34)</sup>と秋江<sup>(35)</sup>、東北部の甌皮岩<sup>(36)</sup>をとりあげたい。

頂嶺山文化の標準遺跡である邕寧頂嶺山は、第一期から第四期までの4期に分期されている。中心となるのは第二期と第三期で、墓、少量の灰坑、及び土器、石器、蚌器、骨器等の遺物が出土した。土器は、夾砂質の丸底罐や丸底釜を主体とし、表面には籃文や縄文が見られる。また、蚌器は、大型の貝殻を利用して作られた有孔蚌刀が特徴的である。蚌刀は数も多く、両期あわせて46点を数える。

頂嶺山の墓は、第二期で16基、第三期で133基が検出された。これらはいずれも単人の堅穴土坑墓であるが、方形もしくは長方形とされる墓坑の輪郭は不明瞭である。副葬品は少なく、装具も確認されていない。ただし、報告される墓の多くに複数の石塊が埋納されていた。紹介される墓のうち、第二期文化は4例中3例に、第三期文化は8例中6例に石塊の埋納が認められる。数は、5点、9点、2点(以上第二期文化)、4点、6点、6点、13点、3点、3点(以上第三期文化)となっている。実測図を見る限り、石塊のかたちに規則性はうかがえず、原石をそのまま使用したと考えられる。葬法は、仰身屈肢、側身屈肢、俯身屈肢といった屈肢葬、そのほか、蹲踞葬<sup>(37)</sup>と肢解葬<sup>(38)</sup>が確認されている。

蹲踞葬と肢解葬の事例を紹介してみたい。第三期の142号墓は、長さ55cm、幅49cm、深さ32cm

(33) 広西壮族自治区の新石器文化に関しては、彭長林・呉艾妮・周然朝「試論広西新石器時代文化」『広西考古文集』第3輯、2007年、などを参照。

(34) 中国社会科学院考古研究所広西工作隊・広西壮族自治区文物工作隊・南寧市博物館「広西邕寧頂嶺山遺址の発掘」『考古』1998年第11期。

(35) 広西壮族自治区文物工作隊・横県博物館「広西横県秋江貝丘遺址の発掘」『広西考古文集』第2輯、2006年。

(36) 中国社会科学院考古研究所・広西壮族自治区文物工作隊・桂林甌皮岩遺址博物館・桂林市文物工作隊「桂林甌皮岩」(文物出版社、2003年)、広西壮族自治区文物工作隊・桂林市革命委員会文物管理委員会「広西桂林甌皮岩洞穴遺址的試掘」『考古』1976年第3期。

(37) 蹲踞葬とは、膝を曲げ座ったような姿勢で葬る埋葬法である。頭部は下を向き、腹部と大腿部は折り重なり、両手は、膝を抱える、前で交差させる、あるいは下に垂らした位置どりをする。蹲踞の姿勢に似ていることから蹲踞葬と呼ばれるが、屈肢葬の一形態と考えることができる。蹲踞葬以外に、屈肢蹲踞葬、屈肢蹲踞葬、坐葬といった呼び名も使われている。詳細は、陳遠璋「蹲踞葬探源」『広西考古文集』第3輯、2007年、などを参照。

(38) 肢解葬とは、人骨を関節部分でとり外し、遺体の各部位をそろえて埋納する葬法である。頂嶺山の肢解葬に関しては、覃芳「広西邕寧頂嶺山史前屈肢葬与肢解葬の考察」『南方文物』2010年第2期、などを参照。

の土坑墓である(図1)。人骨は原位置を残してい

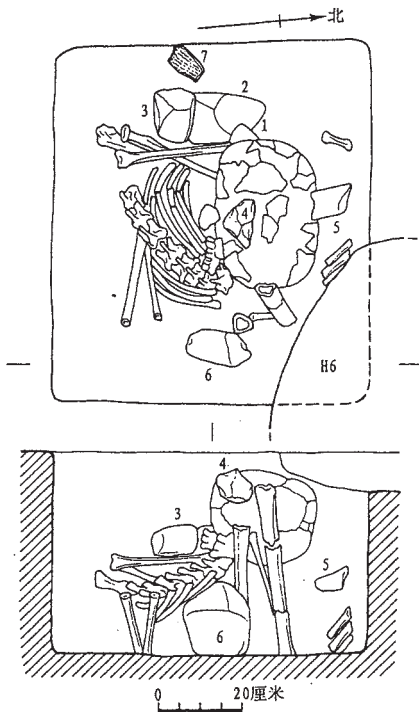


図1 頂蝮山遺跡142号墓実測図

ないが、あきらかに蹲踞の姿勢で葬られていたことがわかる。大腿骨と頸骨は直立し、骨盤は墓底に残存している。6点の石塊が周囲におかれていた。同じ第三期の117号墓は、長さ102cm、幅75cm、深さ20cmを測る土坑墓である(図2)。142号墓よりも墓坑は浅い。この墓の人骨は、頸部、腰部、膝部で断ち切れ、4部位に分けて葬られていた。墓中からは石塊が14個検出された<sup>(39)</sup>。

横県秋江は、頂蝮山文化に属する遺跡であり、

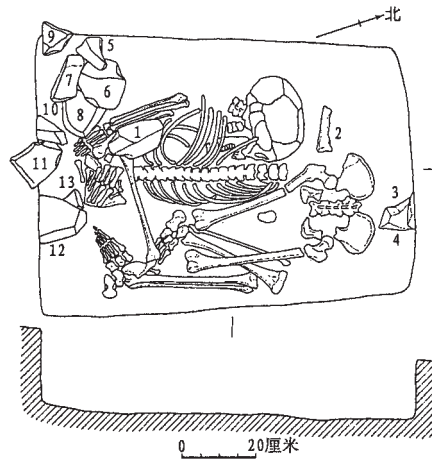


図2 頂蝮山遺跡117号墓実測図

第一期と第二期に分期されている。墓は、独立した4個所の試掘坑から検出され、T1(13基)、T3(39基)、T4(1基)、T5(2基)、計55基を数える。T1とT3では、貝殻堆積層中に人骨が散乱した状態で発見された。当遺跡の墓は墓坑をもたず、副葬品も見られない。そこに明確な埋葬の意図があったのかどうか不明である。葬法は、仰身直肢、仰身屈肢、側身屈肢、俯身屈肢、蹲踞葬、肢解葬、二次葬などが認められる。頂蝮山よりも葬法の多様性は増しており、そこに規律性はうかがえない<sup>(40)</sup>。

桂林甌皮岩は広西壮族自治区の東北部に位置する遺跡である。第一期から第五期までの5期に分期されたうちの、第一期文化遺存から新石器最早期段階の土器が出土したことで有名になった。分析の対象とするのは第五期文化遺存であるが、直前の第四期遺存からも墓が発見されているため、

(39) 似たような葬法がうかがえる遺跡に、百色革新橋がある(広西文物考古研究所『百色革新橋』文物出版社、2012年)。頂蝮山が広西壮族自治区の南部に位置するのに対し、革新橋は西部地区に属する。当遺跡で検出された墓2基は、いずれも境界不明瞭な土坑墓であり、1基は仰身屈肢葬、もう1基は葬式不明となっている。どちらも複数の石塊が埋納されていた。

(40) 明確な墓坑をもたず、屈肢葬が顕著にうかがえる新石器早期段階の遺跡として、ほかに柳州鯉魚嘴がある(柳州市博物館・広西壮族自治区文物工作隊『柳州市大竜潭鯉魚嘴新石器時代貝丘遺址』『考古』1983年第9期)。当遺跡では4基の墓が確認されており、それらは、仰身屈肢、俯身屈肢といった葬法で葬られていた。人骨付近からは石塊が出土している。

それも含めて検討を加えたい<sup>(41)</sup>。

両文化遺存からは、土器、石器、骨器、蚌器等が出土した。土器は罐、釜、鉢、支脚を主体とし、方解石粒を混在させた胎土を使用していた。第五期になると少数ながら圈足器が出現しはじめ、土器製作に進展があったことがうかがわれる。

墓は、第四期文化遺存から2基、第五期文化遺存から2基、計4基が検出された。墓坑は不規則な円形もしくは方形を呈しており、すべてが蹲踞葬であった。副葬品は見られないものの、人骨を覆うように9個の石灰岩を並べたもの(第四期8号墓)(図3)、墓坑中ではなく墓口上部に石灰岩を10個並べ、

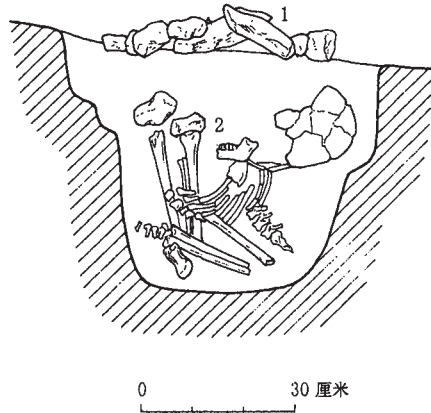


図4 甌皮岩遺跡第五期4号墓実測図

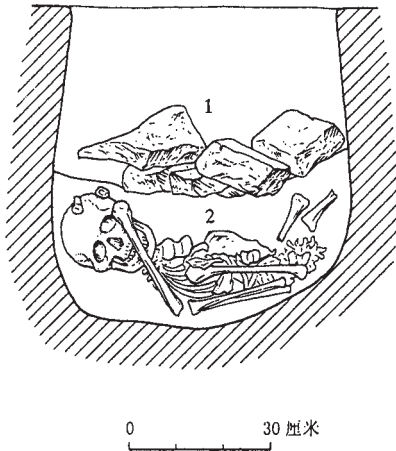


図3 甌皮岩遺跡第四期8号墓実測図

さらに膝上に2個の小石塊をおいたもの(第五期4号墓)(図4)など、埋葬時に石を使用した痕跡が明確に認められる。

#### おわりに—中国化現象のはじまり—

ここまで、新石器早期段階に属する各文化の墓を観察してきた。全体的な印象として、各文化、あるいは各集落遺跡が独自の葬送習慣をもち、それにしたがって死者を埋葬していた様子がうかがわれる。

あらためて、今回考察の対象とした考古学文化を地図のうえにおとすと、図5のようになる。新石器早期段階の文化は、北方地区、黄河中下流域、長江中下流域、南方地区の空間枠のなかで、各地に点在していた。各文化の絶対年代を確認しておく、おおよそ、興隆窪文化(前6200-5400年)、大地湾文化(前5900-5000年)、裴李崗文化(前6200-5500年)、磁山文化(前6100-5750年)、後李文化(前6300-5400年)、彭頭山文化(前7000-6000年)、皂市下層文化(前5900-5000年)、城背溪文化(前6500-5000年)、跨湖橋文化(前6000-5400年)、頂嶺山文化(前6000-5000年)、甌皮岩第五期(前6000-5000年)、となる。これらの文化は

(41) 甌皮岩の年代は、第一期が12000～11000年前、第二期から第四期までが11000～8000年前、第五期が8000～7000年前と推定されている(注36、中国社会科学院考古研究所他報告、459頁、表37、参照)。本論で考察の対象としているのは、前7000年から5000年にかけて、とくに前6000年紀を中心とした時代である。甌皮岩第四期文化遺存がこの時間幅に入ってくる可能性は高い。

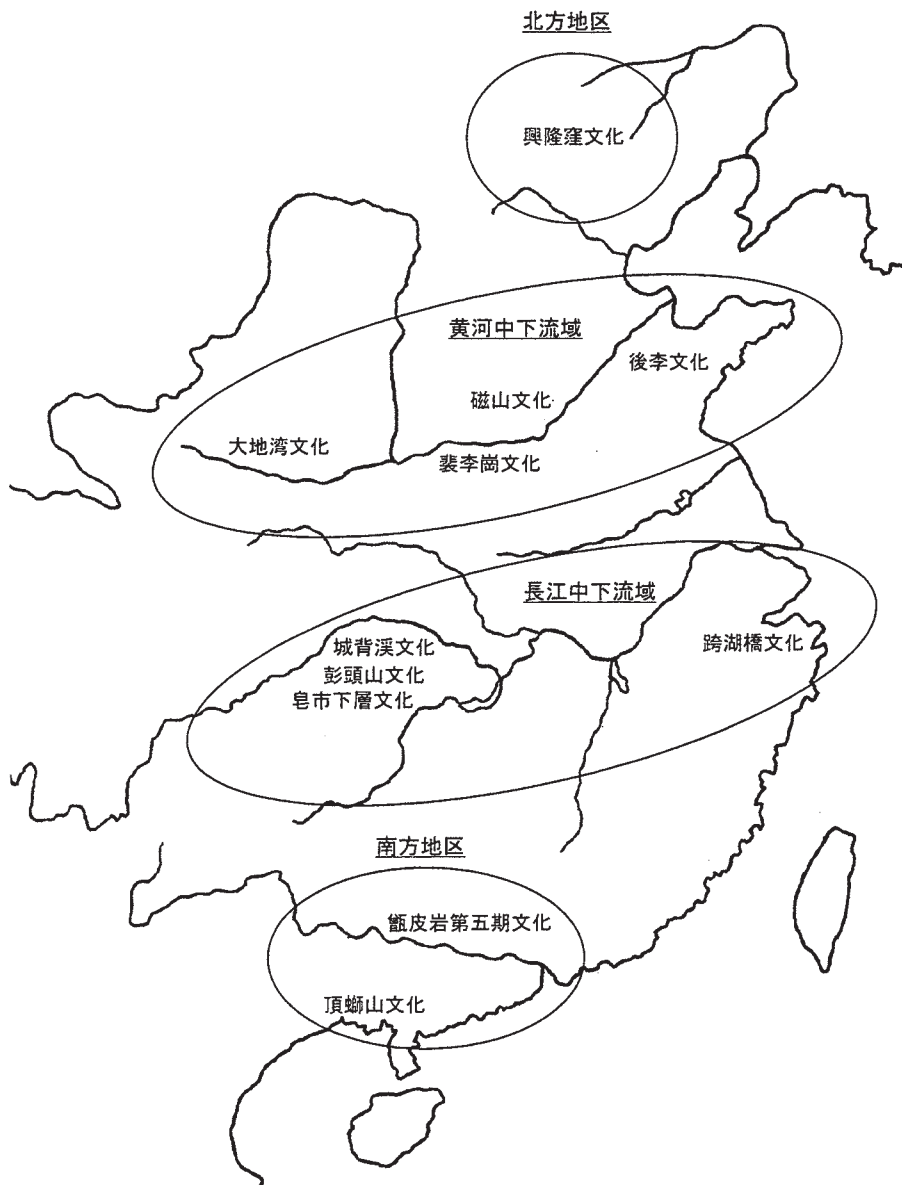


図5 新石器時代早期文化分布図

同時併存しており、新石器早期の諸文化が特定の時間枠を共有していたことがよくわかる<sup>(42)</sup>。

さて、新石器早期段階の葬制をまとめるにあたって、鍵となる単語をいくつか用意しておきたい。そ

れは、「日常性・非日常性」、「規則性・不規則性」、「差異性・階層性」、以上3組の用語群である。

日常性と非日常性は、副葬品に土器や石器などの日常用具を多く用いるのか、それとも非日常的な

(42) 各文化の絶対年代は、注2、中国社会科学院考古研究所編著による。

品物を使う頻度が高いのかに着目した分類基準である。筆者はかつて、特殊性を帯びた埋納品を、①素材そのものの希少価値を利用して加工成形し製作したもの、②素材には大きな加工を加えず、もの自体と使用法に異例性があるもの、③ありきたりな素材を加工成形し、形態や使用法において特異性を発揮させたもの、等に分けたことがある<sup>(43)</sup>。ここでいう非日常的な品物とは、上の基準に合致するもの、例えば、①見た目の美しい玉飾のような身体装飾品、②イノシシの下顎骨、亀甲、石塊の類、③骨笛や用途不明な加工物を想定している。

また、死者を葬る行為自体が非日常的であることは自明の理であるのだが、今、長方形竪穴土坑墓に単人仰身直肢の状態で見られる相違が、社会通念上の現象として普通にあらわれてくる範疇におさまるのか(差異性)、それとも、階級差といえるような質的な相違(階層性)が存在するのか、その違いをあらわす用語である。

また、死者を葬る行為自体が非日常的であることは自明の理であるのだが、今、長方形竪穴土坑墓に単人仰身直肢の状態で見られる相違が、社会通念上の現象として普通にあらわれてくる範疇におさまるのか(差異性)、それとも、階級差といえるような質的な相違(階層性)が存在するのか、その違いをあらわす用語である。

また、死者を葬る行為自体が非日常的であることは自明の理であるのだが、今、長方形竪穴土坑墓に単人仰身直肢の状態で見られる相違が、社会通念上の現象として普通にあらわれてくる範疇におさまるのか(差異性)、それとも、階級差といえるような質的な相違(階層性)が存在するのか、その違いをあらわす用語である。

個人墓のあいだで見られる相違が、社会通念上の現象として普通にあらわれてくる範疇におさまるのか(差異性)、それとも、階級差といえるような質的な相違(階層性)が存在するのか、その違いをあらわす用語である。

上記3組の用語中、日常性と非日常性を横軸、規則性と不規則性を縦軸に設定し、各遺跡を十字線で構成される4区画のいずれかへ帰属させ、さらにそのなかの位置どりを考慮することで、墓の性格を判別できるようにしたのが、図6である。便宜上、

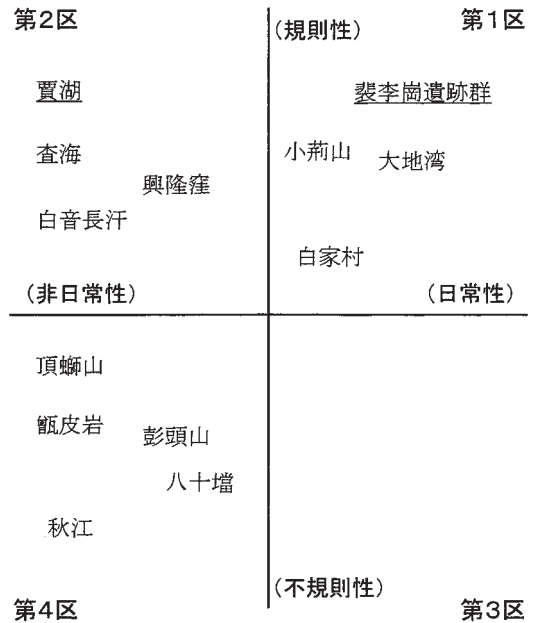


図6 新石器時代早期墓区分図

規則性と日常性に囲まれる区画を第1区、規則性と非日常性に囲まれる区画を第2区、不規則性と日常性に囲まれる区画を第3区、不規則性と非日常性に囲まれる区画を第4区と呼んでおく。なお、差異性と階層性については、あきらかに階層化が見られる

(43) 注8、小川誠2010年論文、77頁、参照。

遺跡に下線を引いてあらわした。

既出の論文<sup>(44)</sup>で検討済みの、裴李崗、沙窩李、莪溝北崗、石固、水泉などの裴李崗遺跡群は、墓地の造営の規律性が高く、とくに裴李崗、莪溝北崗、水泉の墓の副葬品には、総点数に加え、三足鉢と双耳壺という日常用具の埋納点数によって、等級差をあらわそうとする意図が見受けられた。日常性と規則性が最大限に見られるゆえ、裴李崗に代表される遺跡群を第1区の右上部に位置づけた。階層性も群を抜いて高い。これに対して、上記遺跡群よりも南に位置する同じ裴李崗文化の賈湖は、墓地の形成に規律性はありながら、合葬墓や二次葬が多く、遺体には欠頭や欠肢といった特殊処理が施されている。しかも、亀甲、骨笛、骨叉形器等の非日常的な特殊遺物をもって、第一等の等級差を表現しようとした。非日常的でありながら規則性が高いため、第2区の左上部におく。階層性も突出していた。

ここからは、本論でとりあげた遺跡となる。大地湾第一期文化遺存の墓地には家族墓風のまとまりがあった。副葬品の有無や多寡は常識の範囲におさまり、品物は日常の土器を中心としていた。当遺跡は第1区に入る。大地湾文化に属する白家村の墓は、大地湾第一期文化遺存とほぼ似たような様相を呈していた。しかし、女性を中心とした側身屈肢や合葬墓が営まれたり、土器以外に動物の下顎骨や石珠を埋納した事例が散見される。当遺跡は第1区におさまるものの、若干、不規則性・非日常性寄りになる。

続いて後季文化の小荊山は、単人仰身直肢の堅穴土坑墓を中心とし、それらは3列に整然と並んだ状態で発見された。副葬品は全体に少なく、貝殻や貝製品を中心としている。小荊山の墓は、規則性は高いのだが、土器が1点も埋納されていないため、第1区左上に配置した。裴李崗文化を除い

た黄河中下流域の新石器早期の墓に目立った階層性はうかがえない。

北方地区に移りたい。興隆窪では居室葬が大量に発見されている。そのうち、報告が得られる2基は単人の仰身直肢葬で、墓坑からは、玉玦、牙飾、イノシシの全体骨格が検出された。興隆窪は、墓数は少ないながら、居室葬という埋葬形態と副葬品の性格から判断して、第2区に組み入れることができる。同じ興隆窪文化の査海では、堅穴土坑墓と居室葬が営まれていた。土坑墓は単人の仰身直肢葬であり、副葬品も土器や石器を主体とするなど、墓自体は日常性の範囲をこえるものではない。しかしながら、当墓群は、「竜形堆積」と呼ばれる石積堆積遺構や、イノシシ、玉器を封入した灰坑など、非日常的な遺構群と組み合わせるその存在意義を把握する必要があり、また居室葬も発見されていることから、第2区に配置した。北方地区3つ目の遺跡、白音長汗は、長方形石板墓と積石土坑墓が特徴的である。石を葬具として使う葬制自体は、それがそのまま非日常性をあらわすものではない。しかし、乙類の墓に屈肢葬等の葬法を使っていることや、副葬品に蚌飾、石飾、玉飾等の装飾品が多うかがえることから、興隆窪や査海と同じ第2区に位置づけた。北方地区の3遺跡に顕著な階層性は確認されていない。

長江中下流域に入る。長江中流域の彭頭山と八十壩は、土坑墓の形態が多様であった。報告者はそれらを、方形、長方形、楕円形、不規則形等に分類するが、これは要するに、墓の造作に統一性がなかったことをあらわしている。一方、日常性・非日常性の観点からは、彭頭山で単人の二次葬が半数以上を占めていること、両遺跡ともに、副葬品は土器を中心としながら、埋納意図不明の土器片が多く検出されていることから、非日常性に寄った墓群と判断できる。彭頭山と八十壩は第4区

(44) 注8、小川誠2010年、2011年論文、参照。

右下に属すると判断できる。

最後に南方地区の墓を検討したい。当地区を代表する遺跡は頂嶺山である。頂嶺山の墓は、堅穴土坑墓でありながら輪郭が不明瞭であり、仰身、側身、俯身の屈肢葬、蹲踞葬、肢解葬等、さまざまな葬法が適用されていた。石塊の埋納も認められる。これは第4区の左側上部に入る。頂嶺山文化のもうひとつの遺跡である秋江は、貝殻堆積層中に人骨が散乱した状態にあった。副葬品は見られず、葬法も頂嶺山と同じく多彩である。当遺跡は、頂嶺山と同じ第4区への組み入れとなるが、これまでの遺跡のなかで不規則性は最も高い。甌皮岩の第四期文化遺存、第五期文化遺存は、墓の数が少ないものの、共通して、不規則な形態の墓坑に蹲踞葬が認められる。そこでは、石塊の埋納等、石を使った葬俗が顕著であった。甌皮岩も、他の2遺跡同様、第4区に配置される。南方地区のこれらの墓に階層性は認められない。

ここであらためて図6を眺めてみると、第3区には遺跡がひとつも見当たらない。これは、日常性に傾いた墓でありながら、墓地の運営に統一性がない、あるいは墓坑の規格が不斉一という状況は、新石器早期段階においてほとんど存在していなかったことをあらわしている。さらに、第3区以外の区画を見ると、きれいに地域が分かれている。第1区には黄河中下流域の遺跡、第2区には北方地区の遺跡、そして第4区には長江中下流域と南方地区の遺跡が集中する。

それらのなかで、階層性が明確にうかがえるのは、第1区の裴李崗遺跡群、及び第2区の賈湖のみである。どちらも裴李崗文化に帰属する。しかし、賈湖は遺跡のおそい段階になると階層性を喪失していく。階層性の出現は一過性のものであった。墓の様子を観察する限り、継続的に格差の存在する社会を生みだしていたのは、第1区に分類され、かつ河南省中央部に点在する裴李崗遺跡群のみである。

中国の歴史の流れのなかで、長期間にわたり政治経済活動の中心として機能していくのは、のちに中原と呼ばれる黄河中流域地帯である。新石器早期段階において、規則性と日常性をそなえた墓を造営した黄河中流域地帯は、非日常性の希薄な、どちらかといえば、感性ではなく理性に支配された世界を創出していたと考えることができる。そしてそのなかに、裴李崗遺跡群のような、階層化が意識された社会が存在していた。今、階層性をもった社会が、そうでない社会よりも、より先進的、より発展的であったとするならば、中原の中原化現象、すなわち中国化現象は、新石器早期段階の黄河中流域地帯ですではじまっていたとみなすことができる。

なぜ、規則性と日常性をそなえた墓を有する黄河中流域でいち早く社会が進展し、階層化のきざしがあらわれるようになったのか、なぜ、非日常性や不規則性がまさる墓が出現した土地では同じ時期に社会の階層化に至らなかったのか、明確な答えを見つけることはできない。しかし、それが、黄河中流域という地理的な位置どりに由来していることは容易に想像できる。中原は先験的に中原となる可能性を秘めた場所であった。中国の中国化は、新石器という時代のなかで、黄河中流域を中心に、文化の収斂と拡散を繰り返しながら周到に準備されていったに相違ない。

#### 図出典

- 図1 『考古』1998年第11期、21頁、図二〇。
- 図2 『考古』1998年第11期、21頁、図二一。
- 図3 『桂林甌皮岩』、133頁、図七一、一部改変。
- 図4 『桂林甌皮岩』、150頁、図八一、一部改変。
- 図5 筆者作成。
- 図6 筆者作成。